

平成20年度 内閣府青年国際交流事業の概要

<カンボジア王国訪問成果発表会・レポート>

Cambodia 訪問団一同

はじめに

平成20年度カンボジア派遣団は、1人ひとりの視点・関心を互いに尊重しつつ、団員及びカンボジアの人々と共に学びあうことを目標とし、「learn together 共に学ぼう～それぞれのカンボジア」というスローガンを掲げました。

このスローガンを実現するために、每晚団MTを行うなど団内の交流や、現地の青年や子供たちとの交流に積極的に取り組みました。

それぞれ専門も興味も異なる中、共通して特に印象深かったのは次の3点です。

一つ目は、カンボジアの人々との交流です。王立プノンペン大学の学生たち、ボーイスカウトの子供たち、招へい青年たちとの交流を通して、カンボジアの人々の向上心の高さや好奇心の強さに触れ、刺激を受けました。しかしその一方で、カンボジアの人々から多くの日本人の仕事や勉強に対する姿勢を見習いたいと言われ、日本の良さを再発見することができました。カンボジアの人々との交流は、お互いの国に対する興味の喚起につながりました。



<情熱的に語る山持さん>

二つ目に、現地で活躍する

日本人との出会いです。

特に私たちの印象に残った方は山路さん、倉田さん、森本さんの3人です。山路さんはアマゾン開発の経験を生かして、JICAのシニアボランティアとして国立公園の整備の支援をしています。

倉田さんは、現地の特産品であったコショウに目をつけて、起業し、現在も商品販売の研究をしている方です。

森本さんは、伝統的な織物を復興させ、生活困難な人々を優先的に雇用したり、森林の保全や回復にも携わっている方です。

こうした方たちは、自分の技術に誇りを持ち、困難を経験しながらも信念を貫き、現地の人々と共に現地に適した方法でカンボジアの発展に貢献しています。そうした姿に私たちは大変刺激を受けるとともに、尊敬の念を抱きました。

また、お話を伺う中で現地の人と信頼関係を築く難しさを知ったり、考えさせられたりしました。

三つ目に、物乞いについてです

カンボジアでは物乞いの人を多く見かけました。例えば、お寺や市場などで手を差し出している老人や子どもなどです。その現状を私たちは生で見て、衝撃を受けました。

そして、物乞いの人にお金をあげるべきかどうかなど、議論をし、さまざまな意見ができましたが、答えは結局まとまりませんでした。

カンボジア特有の事情があり、一概に私たち日本人の視点で捉えるべきではないこと、そしてカンボジアの人がこの問題を考えることが大切ではないかということは団員皆が共通して抱いた思いです。

そして最後に、街並みから感じたことです
2008年7月の事前研修の際、カンボジアに対するイメージをみんなで出し合ったことがあります。その時のイメージは、ほとんどのメンバーがカンボジアに対して、内戦や地雷・発展途上などのネガティブなイメージを抱いていました。

しかし、実際にカンボジアを訪れてみると、首都のプノンペンでは発展していて現地の人々からは活気があふれていると感じられました。カンボジアの都市部では新しいビルが多数建設されつつあり、その発展ぶりは目覚ましいですが、その反面、ごみを捨てるのが悪いという感覚が浸透しておらず、ごみの収集・処理システムも整備されていないため、市外には多くのごみが散乱しているのが現実です。

地雷は国境付近の奥地にはまだ残っているようですが、日常的に目にすることはありませんでした。

私たちが抱いていたイメージは、貧困や地雷というほんの一部であり、実際に訪れてみることで、日本では知ることのできないポジティブな面を多く見ることができました。



このようにして私たちは、当事業でさまざまなものを見て、感じ、考え、団員や現地に出会った人々と共有してきました。

よって団としての目標である“learn together それぞれのカンボジア”を達成できたと考えます。しかし私たちの活動はまだ始まったばかりです。この事業はスタートにすぎません。今後は団員一人一人がカンボジアのマイナスイメージの払拭、当事業で学んだことを今後につなげていくことに努めていきたいと思えます。同時にカンボジアで出会った人々との交流も続けていきたいと思えます。

